

葉集を読む

松岡 隆子

秋の蝶うす日のやうに現るる

醍醐喜美枝

秋日和のなかを盛んに飛び回っていた蝶も、秋が深まるにつれ飛ぶ力も弱々しくなってくる。晩秋の淡い日差しを飛ぶ小さな蝶の姿は日差しに同化して消えてしまふそうだ。だが醍醐さんの眼はその姿を確りと捉える。醍醐さんには薄日のなかから現れた蝶は、薄日を通して飛んできたように思えた。繊細な感性によつて幻のような秋の蝶が描かれた。

エプロンの端に秋思を拭ひけり

宮崎美智子

「秋になると、それまで勢いよく茂つていた草木も少しずつ凋落の色を見せはじめ、木立の中を行くと透きとおつた風が人恋しげに身にまつわる。大気は快く冷え、夜は青い月光が身を浸し、美しい虫の音に鳴き包まれる。そうした状況の中で人は故知らぬ物悲しさにかられるのである。」

以上は、新日本大歳時記の「秋思」の解説の一部である。読みながら秋思の世界に引き込まれ、その美しい文体に魅せられた。長い解説の最後に（岡本眸）とあった。先生の解説とあらば書き留めておきたいと、少し長くなったが引用した。

「いえいえ、私のはエプロンの端で拭うほどの秋思にすぎないのでから」という宮崎さんの声が聞こえてくる。夕度をしながらのちよつとした物思い。それも秋ならではの、その小さな秋思を掬いとして俳句に詠む宮崎さんの詩心も秋ならではのと言えよう。

度忘れに記憶のもどりねこじやらし 河本 順

度忘れをすることは誰にもよくある。顔は思い浮かぶのに名前が出てこない、いつも行っている店なのに名前が思い出せない、等々挙げれば限がない。少し経てば思い出せる頃はまだよいが、齢を取るとつれてだんだん思い出せなくなってくるのは哀しい。すぐに記憶が戻るとは、河本さんはまだ若い。すぐに思い出せたのだから気にすることはあるまい。（ねこじやらし）の屈託のなさが（度忘れ）という生な言葉を送りげなく受け止めている。

蝉殻を脱ぐ見ぬやうに見ぬやうに 田辺 文枝

蝉は、長い間地中で幼虫として生き何度か脱皮を繰り返したあと、地中から出てきて羽化し、成虫となる。羽化は外敵から身を守るために夜ひっそりと行われることが多くなかなか見られないと聞くが、田辺さんは運よく羽化の場面に出合ったようだ。ひとつの命が生まれる神秘の瞬間を息を凝らして見ている様子が窺える。神聖な場を穢してはならないと、慎み深く見ている。（見ぬやうに見ぬやうに）の実感はずいぶん純真だ。